日本における動物犠牲の狩猟文化的意義

― 統計・狩猟活動・狩猟儀礼 ―

名古屋大学文学研究科
人文学専攻 文化人類学・宗教学・日本思想史専門

鈴木良幸

目次

序論

第Ⅰ部　統計からみた日本の狩猟

第一章　制度からみた狩猟
第二章　狩猟人口の推移と鳥獣の総捕獲数
第三章　鳥獣の捕獲目的と種別捕獲数の変化
第四章　鳥獣捕獲数の地理的分布

第Ⅱ部　宮崎県西都市の狩猟とイノシシ文化

第五章　狩猟文化の地としての西都市銀鏡
第六章　西都市銀鏡地域のシシ狩
第七章　西都市銀鏡の罠猟
第八章　イノシシ飼育と競り市

第Ⅲ部　動物犠牲の狩猟文化的意義
―山の神との関係において―

第九章　狩猟活動における「悪い行為」と「サスライ」
―活動の「神事性」との関係において―
第十章　共食儀礼としてのカクラ祭と狩に関する神
第十一章　三遠南信地方シカウチ儀礼の狩猟文化的意義
第十二章　諏訪大社上社御射山祭と山の神祭
第十三章　宮崎県西都市銀鏡神社大祭の狩猟文化的意義

結論

問題の所在

日本では弥生時代以降、稲作が広くおこなわれてきており、日本を特徴づけるのは稲作文化だという見解もある。しかし、その日本にも古くからの狩猟文化がある。それは野生動物と人とのあいだに構築された両者の関係をつなぐ文化であり、そこには動物を殺して食べるという活動を通して経済的関係が営まれてきた。ただし、動物の屠りの際などには動物儀礼がおこなわれ、両者のあいだには宗教的関係が形成され、伝承されてきた。動物儀礼は野生動物と人の関係における世界観を象徴する問題である。

これまでの動物犠牲[1]に関する研究では、野生動物を「殺す」場面にスポットがあてられることが多く、殺すことへの罪業観、および魂の送りや慰霊、鎮魂の論理が明らかにされてきた。しかし本研究では、狩猟活動プロセスに目を向け、そこから生み出される心性に着目することで、異なる角度から動物犠牲の意義を考察した。

研究の目的

本論文の目的は、日本における動物犠牲の狩猟文化的意義を、儀礼および狩猟活動の分析を通して解明することにある。そのためにまず狩猟をおこなう際の制度的枠組み、捕獲対象と量的変化から狩猟の傾向と画期を明らかにし、狩猟文化の動態を示した。そのうえで現地調査により実際の狩猟活動における捕獲のための技術とその心性を明らかにし、現代に伝承される動物儀礼との関係を分析することによって、日本における動物犠牲の狩猟文化的意義を解明することを企図した。

[1] 本研究では動物自体を神格とし、地域共同体でおこなう儀礼を指す語として「動物犠牲」を用いた。他方、神に対する捧げものとしての動物の屠りをおこなう地域共同体の儀礼を表す語として「動物供犠」を、またひろく動物に関わる儀礼を指す語として「動物儀礼」をあてた。

構成

第Ⅰ部 統計からみた日本の狩猟

日本の狩猟活動にはどのような傾向と画期があったのか、その動態を知るために制度の変遷および狩猟統計データをまとめ、分析をおこなった。制度からのアプローチでは、明治以降の「官報」データを収集し、法令の変遷、狩猟免許による規制（猟具）、狩猟期間・時間、捕獲可能鳥獣の４つの側面から検討を加えた。「狩猟統計」データは約 100 年間分を収集し、狩猟人口、総捕獲数、種別の捕獲数、種別捕獲の地理的分布について、背景となる社会状況を加味して分析をおこなった。その結果、明治以降の日本の狩猟の画期は、①「乱獲期」、②「戦時狩猟体制期」、③「経済成長期」、④「害獣駆除期」の４つの時期に分類できることが明らかになった。

また、捕獲の地理的分布を検討した結果、「東の羽物、西の大物」という地理的分布が示された。「東の羽物」はカモやキジ、ヤマドリなどの大型鳥であり、「西の大物」はイノシシやシカが顕著であった。宮崎県は大物猟の最も盛んな県の一つであり、大物猟の北限はおよそ長野県あたりにあることが示された。さらに、鳥類および小型獣の捕獲数の激減が示され、狩猟文化の伝承の危機、即ち野生動物との文化的関係性の喪失の危機という転換点を迎えていることが明らかになった。

第Ⅱ部　宮崎県西都市の狩猟とイノシシ文化

第Ⅱ部では、宮崎県西都市銀鏡地域のイノシシ文化について現地調査をもとに論じた。宮崎県は大物猟のセンターであり、銀鏡地域は県内で最も狩猟が盛んな地域の一つである。現地のイノシシと人との関係を、銃猟、罠猟、飼育・流通の３つの側面に分けて論じた。

第五章「狩猟文化の地としての西都市銀鏡」では、銀鏡地域がイノシシ狩の適地であることを論じた。宮崎県は大物猟のセンターであり、なかでも銀鏡地域はもっとも狩猟が盛んな地域の一つである。その地理的条件は下記の３つである。①照葉樹林の典型的地域であり、イノシシ、シカの生息適地であること、②谷地形で耕作地が限られ、焼畑、林業、狩猟などの傾斜地を利用した複合経営がなされてきたこと、③「農具としての鉄砲」を各家が所有していたこと、である。

第六章「西都市銀鏡地域のシシ狩」では、イノシシ狩（シシ狩）の実際を論じた。狩人（カリンド）と呼ばれる猟師は、居住する集落を中心とした領域を狩場とし、地縁組織によって狩猟活動をおこなう。狩人には「狩勘」の習熟が求められる。それは地形・獣道・寝床・射場などの知識や探索の技術を身につけ、シシと猟犬の様子から狩の状況を総合的に判断する力である。一方、猟犬は追い出しと吠え止めの２つの方法により捕獲の決定的チャンスをつくりだす。狩は猟犬を中心におこなわれ、これに人の役割としてシシの居場所を推定して狩場を決めること、および確実にシシを仕留めることを加えて成り立っており、この関係には「人犬一体」と呼ばれる境地がみられた。また、狩組織には厳格な役割分担がみられ、多くの取り決めがあった。なかでもタマスと呼ぶ猟果分配の取り決めは厳密におこなわれた。

第七章「銀鏡地域の罠猟」では、小鳥から大型動物にいたる罠猟について論じた。そのために罠の具体的な構造、捕獲対象、設置場所、設置者を検討した。その結果、自宅周辺の罠は小鳥を対象とした子どもと高齢者の仕事で、その獲物は日常のタンパク源とされたこと、奥山の罠は狩人が担い、猟果は個

人の取得とされたが、大型動物のみ近隣への分配がなされたことが示された。また、誰が仕掛けたのか分かる罠の工夫は設置者の個性であった。しかし、シシ罠には猟犬がかかるため、経済的必要と倫理観とのあいだで揺らぐ狩人の姿がみられた。罠猟には分配の取り決めや儀礼はみられなかった。

第八章「イノシシ飼育と競り市」では、狩人や生産者による多様なイノシシ飼育、およびその流通システムとしての競り市の発展を論じた。西都市でみられたのは、人家にやってくる「半飼育」に近い子イノシシや、狩人がおこなう成獣までの「一時飼育」、および生産者による大規模「飼育」（繁殖による代々飼育）であった。生産者のひろがりは、南九州を中心に長崎県や高知県にもおよんだ。野生イノシシを都市で利用するためには、山間地と都市をどのように結びつけるかが問題となる。そこでまず仲買商が山間をめぐるシステムがつくられ、のちに猪事業組合が立ちあげられて、生産者が持ち寄る競り市システムへと更新された。これによって野生と都市を結びつける一つの可能性が示されたが、バブルが崩壊すると事業者は厳しい状況におかれた。また、屠りにともなう儀礼はみられなかった。

第Ⅲ部　動物犠牲の狩猟文化的意義 ―山の神との関係において―

狩猟活動における狩人の心性と地域共同体の動物犠牲との関係を論じた。そのために狩人の語りをもとに狩猟活動における災いとその浄化の世界観を分析し、地域共同体の共食儀礼としての動物犠牲との関係性を考察した。その分析をもとに、三遠南信地方のシカウチ儀礼、長野県諏訪大社上社の御射山祭、宮崎県西都市銀鏡地域の銀鏡神社大祭の狩猟文化的意義を明らかにした。

第九章「狩猟活動における『悪い行為』と『サスライ』―活動の『神事性』との関係において―」では、狩人の語りをもとに狩猟活動における「悪い行為」と「災い」、およびその浄化の世界観を分析した。「欲」を背景にした獲りすぎの行為は、サスライとよぶ身内の不幸をもたらすと考えられていた。また、狩猟活動中に悪いことをすると妬みや不満の応酬となり、ジュウガタギッて不猟になると語られた。悪を浄化する原動力となったのは、家族や集落に「きれいな獲物」をもたらすことであった。そのためには厳格なルールや欲猟の戒め、活動中の儀礼によって悪い行為を排除し、活動プロセスを浄化した。また獲物を清浄に扱い、いつくしむ（斎く）こともみられた。これは獲物を浄化するとともに神格化することにつながり、地域共同体の祭りとしてニエが共食されることとの関係が示された。

第十章「共食儀礼としてのカクラ祭と狩に関する神」では、集落にもたらされた「きれいな獲物（ニエ）」はどのように扱われるのかを考察するために、集落での共食事例を検討した。一頭分のイノシシ肉は、集落全戸にいきわたる余剰性をもつ。共食は短期で蕩尽する必然性にもよっていた。検討の結果、小集落単位でおこなわれるカクラ祭はニエ狩の猟果を全戸で共食する祭りであること、および共食にはニエを食べることの厳格な儀礼化がみられること、が明らかになった。

一方、銀鏡地域ではコウザケ、カクラ神、山の神と呼ばれる神があり、いずれも狩の神であるとされる。それぞれの神の差異を明らかにするために、狩人の儀礼および伝承される物語を考察した。その結果、それぞれの神は山の神が性格を変えてあらわれたものと考えられる。

第十一章「三遠南信地方シカウチ儀礼の狩猟文化的意義」では、儀礼と狩猟活動との関係を考察した。シカウチ儀礼は草木でつくったシシを弓で射る儀礼として、各地で異なる次第構成によって催行される。各地区の次第と構成要素をまとめると、その要素は「模造獣を射る」「御鍬祭」「マミタタキ」「的うち」

「御神楽」「田作り」であることが示された。つぎに狩猟要素を明らかにするために最も複合的な次第をもつ小林地区を中心に分析し、「実際のニエ狩」「模擬狩」「模造獣のハラワタ」「ハラワタの神供」「ハラワタの共食」という要素を明らかにした。この要素とこの地方における実際の狩猟活動プロセスとの比較をおこなった結果、シカウチ儀礼は①狩猟活動プロセスを模擬的におこなう儀礼であり、②山の神との関係でおこなわれること、③地域共同体のハラワタ共食儀礼であること、が明らかになった。

第十二章「諏訪大社上社御射山祭と山の神祭」では、現行儀礼にみられる御射山社への渡御の概要を示したうえで、その背景を中世の史料に求め、中世室町期の原山（御狩野）における御狩神事の次第要素と狩猟活動との関係を考察した。その結果、御射山祭では山の神への祈願を柱として狩がおこなわれ、「精進—カリツドエ—山の神への奉幣祈願—御狩—シシ肉の共食」が一連の次第としてみられること、狩猟儀礼を基礎とした祭りが諏訪盆地という大きな地域を統括しておこなわれうることが示された。

他方、各地の御射山祭の分布と内容を検討した結果、①鹿頭をあげるもの、②仮宮と渡御に関するもの、③ススキを使用する神社祭祀、家庭行事、④ウナギを放流するものの４つに分類できた。これらの背景には山の神があり、狩猟、山仕事、腹病や疫病、厄などの災厄を祓うための祈願対象となっている。

第十三章「銀鏡神社大祭の狩猟文化的意義」では、宮崎県西都市銀鏡地域の銀鏡神社大祭をとりあげ、その狩猟文化的意義を論じた。ニエがどのように扱われるのかを問題とするために、大祭の奉仕者がどのような奉仕をおこなうのかを検討した。その結果、構成要素は「シシを食べる次第」「神楽の次第」「模擬狩猟の次第」の３つに分類することができ、①ニエは神格であるとされていること、②厳格に調理して食べる次第が組み込まれていること、③ニエに斎く（いつくしむ）組織とその行為があること、が示された。大祭はニエを受けとる地域の者が精進潔斎し、斎き、神楽を奉納し、共食する儀礼として捉えられる。

結論

狩猟活動には、貴重な食べ物を地域にもたらすという大きな善があった。狩人の第一の目的は、野生動物を「殺す」ことにではなく「食べ物を皆にもたらす」ことにある。動物犠牲は、ニエを中心として「狩猟活動のプロセス」「地域にもたらされる猟果自体」「それを受けとり食べるプロセス」の三者が清浄となることで儀礼をおこなう集落全体の行為が浄められ、集落全体が浄化されるという宗教的システムであることが示された。殺すという視点のみではなく、狩の活動全体をシステム的に捉えることで、新しい動物犠牲の捉え方が提示されたといえよう。